

第25回母子保健奨励賞 受賞者の業績



奥瀬 郁子氏 (51歳) 保健師・青森県

病院勤務後、昭和53年より浪岡町に奉職。小学4年生を対象に禁煙教室を行い、中学1年時に再実施するなどして中学生の喫煙経験者を減少させた。また医師や栄養士、保健師らと協力しながら小児生活習慣病予防教室の運営に尽力。毎年教育委員会と連絡を取り合っ教室を継続し、ここ数年、要注意児童や要精密検査児童の占める割合が低下。幼児期の歯科保健の重要性にも注目し、幼児歯科教室の実施に大きく貢献した。



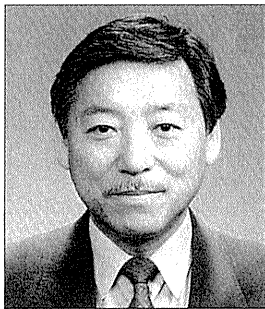
佐藤 由美氏 (53歳) 保健師・山形県

昭和50年三川町に奉職。乳幼児期・就園期・学童期をとおして共通理解のもとに児の成長を見守る必要性を提言。乳幼児健診時の要フォロー児について就園後も情報交換し、児や家族に働きかけている。保育所や養護教諭等、関係機関や関係者との連絡会も実現させた。また3世代同居が多く共働き夫婦に代わって子育てに携わる祖母が多いことに着目。「おばあちゃんのための育児セミナー」を開いて育児への理解を得るなど好評を博す。



石田 覺也氏 (51歳) 歯科医師・群馬県

昭和56年渋川市に石田歯科医院開設。乳歯むし歯の保有状況改善のため、乳幼児歯科健診、歯科保健教室に従事。保護者への歯科保健指導や衛生教育の指導に取り組み、小児のう蝕予防にフッ化物歯面塗布による歯質強化の普及啓発を行う。「元気県ぐんま21」の歯科保健計画での「12歳児のう蝕経験歯数を一本以内に」との目標達成に向け、学校での「フッ化物洗口」の普及啓発に推進的役割を果たし、幼若永久歯の歯質強化に努めた。



久保 実氏 (50歳) 医師・石川県

昭和58年より石川県立中央病院勤務。未熟児治療にかかわり「後遺症なき生存」を目標に新しい検査機器や治療法を積極的に導入、県内の新生児死亡率の改善に大きく貢献した。また未熟児の運動発達支援のため理学療法的重要性を唱え、理学療法士の研修体制を整える等、その体制づくりに力を注いだ。さらに新生児を緊急搬送するドクターカーの改良型「石川モデル」を全国に普及させた功績は大きい。



正藤 露子 (50歳) 保健師・福井県

昭和61年坂井町に奉職。母子保健推進員の育成と地域のヘルスリーダー的役割を担う地区組織活動の強化に尽力。その結果、乳幼児健診受診率95%の高率を得た。また新生児全員に保健師が家庭訪問を行うなどして、母親が本音で相談できる機会づくりに貢献した。祖母の育児との関わりも多いことから、最近の育児情報を提供するなど母親の代弁者としての役割も果たす。むし歯予防の取り組みでも9か月児からの早期教育を展開した。



岡 澄子氏 (52歳) 保健師・山梨県

昭和48年勝沼町に奉職。幼稚園、保育所に保健師が出向く健康チェックや、要経過観察の児が希望する保育所とマンパワーの確保に尽力した。最近の核家族化による育児不安や、離婚による母子家庭の増加などの現状を見据え、母と子の心の絆を深めようと母乳哺育推進を図る。また、母乳哺育の手記を小冊子にまとめて好評を得た。母親の心の悩み相談にも積極的に関わり、地域で共に子育てできる町づくりを目指し取り組んでいる。



市原利恵子氏 (54歳) 保健師・愛知県

昭和54年江南市に奉職。市で初めて採用された保健師として、核家族化の進む団地を重点に乳児全戸訪問による個別支援を行った。障害児と親への支援を行う関連機関の相互理解を深めるため、母子保健連絡会を設置し、地域の療育体制の強化に貢献。母子の孤立化が進むなか、地域で親同士が声をかけ合える環境づくりを提案し、産前・産後の教室にグループワークを取り入れるなど運営に工夫を凝らし、親子の健全育成に努めた。



黒田由美子氏 (46歳) 保健師・三重県

昭和58年長島町に奉職。「妊婦の悩みは共通であるが相談相手がない」「妊娠、出産、育児全般が母親に委ねられている」との認識から、父親の育児参加を求めた学級を開催し、妊婦の不安の軽減と仲間づくりに貢献。家庭・教育・福祉など町全体で取り組む施策「健康づくり推進協議会」の発足や住民・母子保健関係者が一体となり推進する「ながしま子どもすこやかプラン」の策定に尽力、地域で子育てを支援する体制を構築した。



藤江のどか氏 (51歳) ケースワーカー・大阪府

昭和49年大阪府に奉職。昭和56年大阪府立母子保健総合医療センター開設時から勤務し、医学的、経済的、社会的問題を抱えた妊産婦の相談に応じる。年間4,000件を超える相談に的確な助言を行い、幼児虐待の予防と援助にも力を注ぐ。院内組織「児童虐待防止研究会」では、数々の相談事例に精通している事により医療スタッフから厚い信頼を得る。また訪問看護にかかわる煩雑業務を積極的に調整し、円滑な推進に努めた。



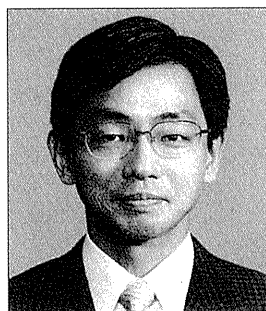
野山 幸子氏 (52歳) 保健師・岡山県

昭和49年岡山県に奉職。愛育委員の協力を得て母子クラブの結成に尽力。乳幼児の心の発達を中心に健康診査の充実に参加した。特に多動児、自閉症児の早期発見と適正な療育指導に努め、子どもの心身の発達を促進させた功績は大きい。またO157の集団発生の際には、感染予防と親子の心のケア、急性期を脱した心的外傷後ストレス傷害 (PTSD) の対応に重点的に取り組むなど、全国に先駆けた母子保健活動に尽力した。



齋藤美登里氏 (50歳) 保健師・山口県

昭和53年久賀町に奉職。孤立しがちな母親の身近な相談相手になるために母子保健推進員と保健師の同伴訪問体制を整え、虐待予防に向けた育成支援を実施。保育所巡回の虫歯予防活動に紙芝居を制作、地区組織に対する研修会の実施等を行い、平成5年3.1%だった罹患率が平成13年には0にまで改善された。また、地域の「子育て輪づくり運動」の推進者として健康生活推進協議会に効果的で有効な保健指導を行い多大な貢献をした。



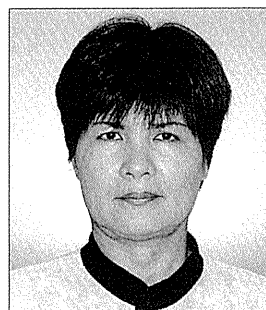
吉川 清志氏 (51歳) 医師・高知県

昭和52年県立中央病院勤務。適切な小児医療継続のため、輪番の5病院に加え、高知医大、開業小児科医、勤務小児科医全てが協力する県独自の体制を構築。県内初の厚生労働省認可のNICU（新生児集中強化医療施設）の開設、山間地域の乳児健診やNICU退院後のケアや情報交換を行う“親の会”設立に中心的役割を果たす。県の協力を得て、高知市の救急車を利用した病的新生児の搬送を開始、新生児死亡率の低下に大きく寄与した。



須崎ひろか氏 (51歳) 保健師・熊本県

昭和55年牛深町に奉職。母子保健推進員の育成計画に参加、家庭訪問で出会った母親たちを推進員として活用。「多くの人たちが計画・実施・評価の一連の過程へ参加する」ことを基本とした活動趣旨に基づき、母子保健関係機関の担当者や母親たちで結成したチームによる月一度の会議を継続。現在では市の母子保健計画の策定、「ふれあい読み聞かせ活動」の推進などが行われるまでに活発な母子保健運動の展開に大きく寄与した。



長田 節子氏 (52歳) 保健師・沖縄県

昭和63年石垣市に奉職。市の保健師第1号として、思春期から妊娠・出産・育児及び乳幼児保健まで、離島地域の母子保健の基盤整備を図る。地域の「親と子に出会える大切な場」として乳幼児健診に対する意識改革に努め、県の平均受診率を92.6%と高めた。事故防止事業「ドキドキどっきん教室」では消防署・警察署などの協力により救急蘇生法などの指導を導入。その他小中高校生思春期教室などの思春期保健対策にも尽力した。



福永 恵美氏 (54歳) 保健師・福岡市

昭和46年福岡市に奉職。3歳児健康診査のための「育児指導テキスト」を作成し、指導内容の質の向上と均一化に貢献。また、母親の心の健康を把握し母親支援に役立つ指標「エジンバラ産後うつ病質問紙表（EPDS）」を先駆的に新生児等の家庭訪問に導入、活用推進に尽力した。孤立しがちな母親の支援のため育児サークルや子育てサロンの発足にも努め、地域の見守り体制の中での育児環境の充実に貢献した。